

## 日本小児感染症学会若手会員研修会第3回安曇野セミナー

## 小児感染症夏季セミナー in 安曇野顛末記

小 田 慈\*

今年も、信州は安曇野、最高のシチュエーションのなかで、小児感染症夏季セミナーが9月1～2日に開催されました。昨年は台風の直撃を受けたセミナーでしたが、今回はそのようなハプニングもなく、予定されていたスケジュールをすべてこなすことができました。北から南まで、各施設で後期研修中の将来を嘱望される38名の若手医師、チューター10名、スタッフ（長野県立こども病院の方々）4名、さらに森島恒雄小児感染症学会理事長を加えた総計53名が、熱く、そして楽しい2日間を過ごしました。

今回のセミナーの目玉は、事前に6つの研究テーマを決めたうえで、参加者をA～Fの6つのグループに分け、それぞれのグループのチューターの担当の下で自主的にメール審議を進め、セミナー当日に、各チューターのレクチャーに引き続いてグループごとにプレゼンテーションを行い、ディスカッションを進め、グループワークを経て、最終的にはその内容を論文にまとめ、学術誌に投稿するまでもついでに、という企画でした。これは昨年、台風のため、やむなく中止になった計画でもあります。

テーマとしてとりあげられたのは、「耐性化の時代におけるマイコプラズマ肺炎の治療」、「それって本当に感染症?」、「ワクチン/VPD update」、「インフルエンザにどう立ち向かう?—regular flu and new pandemic flu」、「乳幼児早期の発熱にどう対処するか?」、「小児血液培養のベストプラクティス」の6つであり、どれをとっても、学術集会のシンポジウムにとりあげられてもいいような

テーマでした。各チューターのレクチャーも専門的、かつ研修医—これから感染症のプロを目指す方たちにわかりやすいよう配慮された、素晴らしいものでした。それ以上に素晴らしかったのは、グループワークとして発表された各グループのプレゼンテーションでした。きっと、発表された内容は、そのうち「小児感染免疫」に論文として発表されると思います。まだ、これからの方たちが協力して、一生懸命まとめた論文です。どうか、掲載された際には、温かい目で読んでいただけたらと思います。

セミナーの意義は、教育的、学術的な面だけではありません。志を同じくする人々との、地域、年齢、大学、施設を越えた交流、交友の輪を広げることこそ、最も大切なことかもしれません。お互いに気持ちを通じあっているならば、共同研究もスムーズにいくでしょう。受け持ち患者の診断がつかないとき、あるいは特定の検査を依頼したいとき、お互いの顔がみえていけば、本音で相談ができます。難しい話も、解決できます。OnとOffをしっかりと、ということです。

集中して勉強した後は、今回も昨年同様、みんなな楽しみにしていたバーベキュー大会で大いに盛り上がりました。一緒に肉を食らい、ビールを飲み、そして、差し入れの信州産のおいしいスイカをほおぼりながら、あちこちで歓談の輪ができました。そしてひと風呂浴びてリラックスした後、再びOnモードです。症例検討会で、提示された興味ある、でもちょっとこんがらがりがりそうな2症例について、意見を交わしました。アルコールの

\* 岡山大学小児血液腫瘍科/大学院保健学研究科

影響か、初対面の挨拶の際はちょっとシャイなキャラかな、と感じていたメンバーの方も、結構突っ込んだり、突っ込まれたりで、ここでも大いに盛りあがりました。

症例検討会の後は再び広間に集まり、夜遅くまで懇親の場が続きました。日が変わるまで、よく食べ、飲み、歓談しましたが、さすがに皆、若く、体力十分で、翌朝の朝食時間に遅れるメンバーはいませんでした。

締めくくりとして、森島先生が特別レクチャー「リサーチマインドを向上させよう」を講演され、今年の安曇野セミナーは無事終了しました。

今回、セミナーに参加してくれた若き医師たち

には、洋々とした前途が開かれていると思います。感染症に興味をもち、そしてリサーチマインドを身につけた優れた小児科臨床医を育てる一助となるなら、このセミナーを担当する委員会の一員として、これほど嬉しいことはありません。来年も安曇野セミナーは企画されています。どうか、ご支援のほど、よろしく願います。若手の先生方はぜひ、参加してください。

最後になりましたが、ボランティアスピリットの下、いつもお手伝いいただいている、長野県立こども病院のスタッフの方々に心からお礼申し上げます。

\* \* \*